

➤ 王仁三郎と鎮魂帰神

三島由紀夫に『英霊の聲』という小説があります。

この小説は二二六事件の首謀者の霊が、「帰神の会」で呼び出され、人間宣言した天皇を「などとすめろぎは人間となりたまいし」と何度も何度も執拗に呪詛する内容です。この小説の最後に三島が参考文献として挙げた一つが、王仁三郎の下にいた友清歎真の『靈学筌蹄』という書です。帰神の方法は大本の鎮魂帰神法から取ったものでした。

友清は1921(大正10)年の第一次大本事件が起こる前、大本にいて王仁三郎の鎮魂帰神法を学びました。当時、大本教団では盛んに鎮魂帰神を行い、病を治したり、また呼び出される霊に関心を持つ人たちが大本にやってきました。

その一人に浅野和三郎がいます。浅野は東京帝国大学英文科在学中に小泉八雲に学び、卒業後は横須賀の海軍機関学校の英語教官を務め、また英文学者として著名でした。

浅野は子どもの病が祈祷師によって治ったのを見て、この種の現象に非常に関心を持ち、大本に引きつけられ、1916年(大正5)4月に綾部にやってきて王仁三郎に会いました。そして、当時81歳になる出口なおに会い、「自分は生来初めて現実の穢土に清らかさ、麗しさ、気高さの権化ともいひつべき肉体を見た、と思うた。生来未だかつて心の底の底から真に恭敬の念慮をもって、首を下げたことの経験のない自分が、大本教祖により初めて《敬服》といふ言葉の真味を体験せしめられた」と書いています。

浅野はその後、一家で綾部に移住しました。植芝盛平(合気道創始者/‘わんりい’233号参照)といい浅野和三郎といい、それなりの傑物たちが王仁三郎というカリスマの魅力に引かれて綾部にやってきたのでした。

その浅野和三郎や谷口雅春(生長の家・創始者/‘わ

んりい’5月号参照)らは第一次大本事件後、大本を離れて独自の活動を始めました。

➤ 秘かに反戦の意思を伝える王仁三郎

王仁三郎は保釈(責付出獄)中の身で、本来なら国外に出ることなど禁じられていましたが、植芝ら側近を5人ほど連れて秘かにモンゴルに出かけました。王仁三郎はモンゴルを経由して最終的にはエルサレムを目指していたようです。

「東亜の天地を精神的に統一し、次に世界を統一する心算なり、事の成否は天の時なり、煩慮を要せず、王仁三十年の夢今や正に醒めんとす」

と詠った王仁三郎でした。満蒙の地は張作霖や、彼の支援を受けたモンゴル革命軍など複雑な争いの地でもあり、遂に内モンゴルと満州との境界の町パイントラで張作霖に捕まりました。銃殺されようとする段階で日本領事館が介入し保釈され、王仁三郎は熱狂的な信者に凱旋將軍のように迎えられ日本に戻ってきました。しかしその後、1935(昭和10)年の第二次大本事件では徹底的に弾圧され、王仁三郎も島根県の松江で逮捕され、6年8か月もの間、獄中生活を強いられました。しかし1942(昭和17)年7月、大阪控訴院での第二審判決では治安維持法違反については証拠がないとして無罪、また不敬罪でも無罪となり、王仁三郎と夫人のすみ子も保釈されました。

王仁三郎に平穏な生活が戻ってきましたが、訪れる信者の中には前線に向かう兵士たちがいました。王仁三郎はそんな彼らに、鉄砲は空に向けて撃てと助言しました。敵兵を殺さないためです。また、「我敵大勝利」と読める守りを持たせています。

四代教主になる孫の出口直美の婿にと熱心に出口家入りを望まれた栄二が出征する時、王仁三郎に「お国のために尽くします」というような言葉を発したところ、「この戦いは悪魔と悪魔の戦いじ

第24回 「本当の世界平和」を願った王仁三郎

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるい よしひろ)

や。必ず帰ってこい」と言い、事実、栄二は医者から帰郷するようと言われました。柔道も嗜み、頑健な栄二でしたが、身体検査で医者から「体がおかしいから帰郷せよ」と強く言われたのでした。もしかしたらカリスマ的な王仁三郎の霊力がそうさせたのかもしれませんが。

➤ 国家賠償請求の放棄

1945年8月、日本はアジア太平洋戦争に敗北しました。しかし支配権力は国体護持や不敬罪を諦めようとはしませんでした。しかしGHQは10月4日、明治・大正・昭和に亘って民衆を抑圧してきた「思想・信教・集会・言論の自由に対する制限を確立または維持」する法令・制度の撤廃を指令しました。治安維持法なども廃止され、10日には国事犯、政治犯も釈放されました。天皇の名前で有罪とされた大本不敬事件も無に帰しました。

第二次大本事件の弁護士たちは合議の上、無謀な弾圧と長期拘留に対して、政府に対して補償を求めようように決めました。その打ち合わせは亀岡の中矢田農園にある王仁三郎たちが住む家で行われました。たまたま会議中の部屋の前を通りかかった王仁三郎はその補償のことを聞き、補償の請求をするなと言いました。王仁三郎はこう言ったのです。

「今度の事件のお蔭で大本は戦争に関与できない境遇におかれ、人類の平和に対する発言権を与えられた。これはまったく神の恩寵である。今度の事件は神様の摂理でわしはありがたいと思っている。賠償を求めて、敗戦後生活に苦しんでいる国民の膏血こうけつをしぼるようなことをしてはならない」

弁護団はすでに賠償請求額も検討していましたが、この王仁三郎の考えを知った清瀬一郎ら弁護士たちは「これが本当の宗教家だ」と感激し即座に補償の請求を取りやめました。

➤ 「吉岡発言」で世界平和を発信

長い獄中生活は王仁三郎の身体を弱めました。しかし作陶に力を注ぎ、数々の耀碗を創りあげましたが、実は夫人のすみ子によれば「聖師はんは、本当は彫刻がしたかったんや。未決から帰ってすぐその準備をされたが、聖師はんの体が弱っていても

だめだと止めさしたんや。今となって、先生の好きなこと何でもさしてあげたらよかったのになあと思う」と、王仁三郎が亡くなった後、述懐したと言います（出口栄二著『大本教事件』）。

こう見てくると王仁三郎という人間は大彫刻家になっていたのかもしれませんが。ともあれ無尽蔵ともいえるその芸術的なエネルギーは書画、映画、演劇などの創作活動にも表れています。

1945年12月8日、大本事件解決報告祭が綾部で開かれ、全国から1500人ほどの信者が集まりました。交通がまだ整備されていない中、いわば口コミで信者たちがはせ参じたのです。その二日後、王仁三郎は鳥取の吉岡温泉に清遊しました。その吉岡温泉に滞在中、大阪朝日新聞の記者が訪ねて来ました。この時の王仁三郎の談話は、12月30日付の朝日新聞に、「予言的中“火の雨が降るぞよ” 一新しい神道を説く出口王仁三郎翁」という見出しで掲載されました。その談話を紹介してこの項を終えましょう。

「自分は支那事変前から第二次世界大戦の終るまで囚われの身となり、綾部の本部をはじめ全国四千にのぼった教会を全部たたき壊されてしまった。しかし信徒は教義を信じつづけて来たので、すでに大本教は再建せずして再建されている。・・・自分はただ全宇宙の統一和平を願ふばかりだ。日本の今日あることはすでに幾回も予言したが、そのため弾圧をうけた。“火の雨が降るぞよ”のお告げも実際となって日本は敗けた。これからは神道の考え方が変わってくるだろう。国教としての神道がやかましくいわれているが、これは今までの解釈が間違っていたもので、民主主義でも神に変わりがあるわけではない。ただ本当の存在を忘れ、自分の都合のよい神社を偶像化して、これを無理に崇拜させたことが、日本を誤らせた。（中略）いま、日本は軍備はすっかりなくなったが、これは世界平和の先駆者としての尊い使命が含まれている。本当の世界平和は、全世界の軍備が撤廃したときにはじめて実現され、いまその時代が近づきつつある」

この王仁三郎の予言は未だ実現しておりません。